源氏物語

上

桐壺～藤裏葉

今泉忠義
森昇一
岡崎正継
編

原民俗记

源氏物語　上

昭和50年3月25日　初版発行
平成元年4月25日　重版発行

定価 2472円(本体2400円)

編　　者　今泉忠義
森昇一
岡崎正継

発 行 者　坂倉良一

印 刷 所　㈱オリーブ印刷社

発 行 所　株式会社　桜楓社
東京都千代田区猿楽町1－3－1
(郵便番号)101(振替)東京6-18020
(電話番号)　東京03－295－8771

Printed in Japan
(著者検印は省略いたしました)
1393－750318－0723

造本には十分注意しておりますが、万一落丁、乱丁などの不良品の場合は、おとりかえいたします。

凡例

一、本書は、青表紙本系の版本中では最善本と稱せられる首書源氏物語（釋了眞著、寛永十七年跋・寛文十三年刊）の本文を底本とした。

一、本書は、讀解の便を考慮し、左の諸點について手を加へた。

1　段落を分けるために、改行を行つた。

2　底本の句讀點に拘泥せず、句讀點を附した。

3　會話文に引用符を附し、會話主を小字（6ポイント活字）で示した。

4　假名遣を歴史的假名遣に統一した。

5　適宜、送假名を加へた。但し、その場合は、私に加へた送假名の右傍に＊印を附して、他の送假名と區別した。

6　假名を、適宜、漢字に改めた。但し、その場合は、元の假名を振假名として殘した。

7　踊字を、適宜、他の表記に改めた。但し、その場合は、元の踊字を右傍に殘した。

8　漢字を、適宜、假名に改めた。また、宛字などを適當な漢字表記に改めた。但し、その場合は、ともに元の漢字を振漢字として殘した。

9　底本に稀に存する振假名は、〈　〉で圍んで、他の振假名と區別した。

10　編者が稀に私に振つた振假名は、（　）で圍んで、他の振假名と區別した。

11　底本には異本を本文に採り入れた部分が稀にあるが、本書では、その部分の左傍に傍線を附し、イと註記して、他の部分との區別を明かにした。

12　清濁は、底本の全體を調査して得たものを基盤とし、できるだけ源氏物語成立時の清濁に近づけることに努めた。

一、本書は、研究者の便を考慮して、池田龜鑑著「源氏物語大成」校異篇（中央公論社刊）の本文との對校を行ひ、異つてゐる部分については、本文の右傍に・印を附し、その部分の校異を脚註に○印を附して示した。また、「源氏物語大成」校異篇の頁數を本文の下に漢數字で添へ、その各頁の1行・5行・10行の行頭に相當する部分にそれぞれ「・「5・「10の符號を添へた。但し、卷頭には「の符號を附さないこととした。

一、本書の脚註欄には、左のやうなものを載せた。

1　○印を附したもの――本書の本文と「源氏物語大成」校異篇の本文との校異を示す。但し、撥音を表すと目される「ん」「む」相互の相違は、校異の對象から外した。

例

首書・大成　　本書本文　　本書脚註

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たへがたう（首書）
たえかたく（大成）　堪へがたう・　○う――く

いにしへびと（首書）
いにしへの人（大成）　いにしへびと　○へ――への

まさなき事とも（首書）
まさなきことも（大成）　まさなき事ども　○ど――ナシ

給ければ（首書）
給へりければ（大成）　給ひければ*　○給――給へり

2　☆印を附したもの――引用の詩歌およびその出典、本文の清濁の註記、本文の讀み方の參考となるものなどを示す。なほ、「☆過し――すくし」「☆煙――けふり」などのやうに實線で結んだものの下部（「すくし」「けふり」など）は、「源氏物語大成」校異篇の本文の形を參考のために示したものである。

昭和五十年三月

編　者

語の清濁について

本書における語の清濁は、類聚名義抄（平安時代末期成）や平曲（鎌倉時代の清濁を継承するもの）などに見られる語の清濁（以下、古形と呼ぶ）と首書源氏物語に見られる語の清濁とを比較して得た次のやうな事實に基き、源氏物語成立時の語の清濁に近いと考へられるものを採用することに努めた。

一、古形の清んでゐるものの多くは、首書でも清んでゐる。

例　みづがき→みづかき　《參考》　瑞籬ミツカキ（觀智院本類聚名義抄）　端垣ミツカキ（暦仁本古語拾遺・鎌倉初期成）　みづかき（首書）　Mizzugaqi〈ミヅガキ〉（日葡辭書・一六〇三年成・翌年補遺）　みづがき（湖月抄・一六七三年成）

類例　あはたやま・うちき・おほいとの・おほいまうちきみ・おほち・おぼろけなり・かやく・かしがまし・かへすがへす・からきぬ・からころも・こたま、など

二、古形の清んでゐるものの中のいくらかが、首書では濁つてゐる。

例　ふせく→ふせぐ　《參考》　防フセク（圖書寮本類聚名義抄）　防く（スム）（平曲）ふせぐ（首書）　Fuxegui, u, eida〈フセグ〉（日葡辭書）

類例　いきずたま・いちしるし・ささやかなり・そばたつ・たむ、など

三、古形の濁つてゐるものの多くは、首書でも濁つてゐる。

例　まだたく→まだたく　《參考》　瞬マタ、ク（高山寺本類聚名義抄）　まだたく（首書）

Matataqi〈マタタキ〉（日葡辭書）　まだたく（湖月抄）

類例　おいぼふし・おとしあぶす・かはぼり・きらぎらし・さいつごろ、など

四、古形の濁つてゐるものが、稀に首書で清んでゐる。

例　わくらばに→わくらはに　《參考》　和久良婆爾（萬葉集）　ワクラハニ（毘沙門堂本古今集注）　わくらはに（首書）　Vacurauaa〈ワクラワ〉（日葡辭書）

類例　うたがた

さて、右の一、四の傾向から見て、古形を認定するための確證の得られない場合でも、首書で清んでゐる語は古形も清んだ形のものであつた、と認めても略誤りはないといふことができるであらう。一方、右の二、三の事實から見て、首書で濁つてゐるものの古形を確證のないままで推定するのは、困難でもあり、また誤りを犯す危險を伴ふことにもなるであらう。隨つて、本書の脚註の註記は、右の事情を勘案の上で參考に供されることが望ましいといふことになる。

本書の採用した清濁は、古色を多くとどめる首書源氏物語の清濁を基盤としたものであるところから言つても、尠くとも從來の諸書よりは幾分か源氏物語成立時の清濁の形に近づくことができたのではないかと思ふ次第である。

編　者

目次

影印（首書源氏物語關屋卷）
凡例
語の清濁について
桐壺……一
帚木……一九
空蟬……五一
夕顔……五九
若紫……九一
末摘花……一三三
紅葉賀……一四五
花宴……一六五
葵……一七三
賢木……二〇五

花散里……二三九
須磨……二四三
明石……二七三
澪標……三〇一
蓬生……三三三
關屋……三三九
繪合……三四三
松風……三五七
薄雲……三七一
朝顔……三九一
少女……四〇五
玉鬘……四三九
初音……四六七

胡蝶……四七
螢……四九一
常夏……五〇五
篝火……五二
野分……五五
行幸……五三七
藤袴……五五五
眞木柱……五六五
梅枝……五九一
藤裏葉……六〇五

源氏物語主要人物系圖

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

桐壺

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬがすぐれて時めき給ふありけり。はじめより、我はと思ひあがり給へる御方〳〵、めざましきものに貶め嫉み給ふ。おなじ程、それより下臈の更衣たちは、ましてやすからず。朝夕の宮仕につけても、人の心をうごかし、恨を負ふつもりにや有りけん、いとあつしくなりゆき、物心細げに里がちなるを、いよ〳〵飽かずあはれなるものにおほしして、人の謗をもえ憚らせ給はず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部、上人なども、あいなく目をそばめつゝ、いと眩き人の御おぼえなり。唐土にも、かゝる事の起にこそ世も亂れ惡しかりけれと、やう〳〵天の下にもあぢきなう、人のもて惱みぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべうなりゆくに、いとはしたなき事多かれど、かたじけなき御心ばへの類なきを頼にて、交らひ給ふ。父の大納言は亡くなりて、母北の方なむいにしへびとの由有るにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえ花やかなる御方〳〵にも劣らず、何事の儀式をもてなし給ひけれど、とりたててはか〴〵しき御後見しなければ、事有る時は、猶據所なく心細げなり。

前の世にも御契りやふかゝりけん、世になく清らなる玉の男御子さへむまれ給ひぬ。いつしかと心もとながらせ給ひて、急ぎ參らせて御覽ずるに、めづらかなる兒の御かたちなり。一の御子は右大臣

五

○を——をのみ
○ほ、——もほ
☆「おほ、し」ノ「ほ」、首書清ム。
○う——く
○へ——への
○も——もいたう
六
○御——ナシ
○む——う

の女御の御腹にて、よせおもく、疑なき儲の君と、世にもてかしづき聞ゆれど、この御匂にはならび給ふべくもあらざりければ、大方のやむごとなき御思ひにて、この君をば私物におほ、しかしづき給ふ事限なし。はじめより、おしなべての上宮仕し給ふべき際にはあらざりき。おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせ給ふあまりに、さるべき御遊の折〳〵、何事にも故ある事のふし〴〵には、まづ参う上らせ給ふ。ある時には大殿籠り過して、やがてさぶらはせ給ひなど、あながちに御前去らずもてなさせ給ひし程に、おのづから輕き方にも見えしを、この御子むまれ給ひて後は、いと心ことに思しおきてたれば、坊にも、ようせずは、この御子の居給ふべきなめりと、一の御子の女御は思し疑へり。人より先に参り給ひて、やむごとなき御思ひなべてならず、御子たちなどもおはしませば、此の御方の御いさめをのみぞ、なほ煩はしう心苦しう思ひ聞えさせ給ひける。畏き御蔭をば頼み聞えながら、貶しめ疵を求め給ふ人は多く、我が身はか弱く、物はかなき有様にて、なか〳〵なる物思をぞし給ふ。

御局は桐壺なり。あまたの御方〳〵を過ぎさせ給ひつゝ、ひまなき御前渡りに、人の御心をつくし給ふも、げにことわりと見えたり。参う上り給ふにも、あまりうちしきる折〳〵は、打橋、渡殿、こゝかしこの道に、あやしきわざをしつゝ、御送迎の人の衣の裾堪へがたう、まさなき事ども有り。又ある時は、えさらぬ馬道の戸をさしこめ、こなたかなた心をあはせて、はしたなめ煩はせ給ふ時も多かり。事に觸れて、數知らず苦しき事のみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとゞ哀れと御覽

○ほ、——もほ

☆過し——すくし

○む——う

○つ、——て

○殿——との、

○う——く

○ど——ナシ

○は——には

じて、後涼殿にもとよりさぶらひ給ふ更衣の曹司をほかに移させ給ひて、上局に賜はす。その恨、ましてやらん方なし。

この御子、三つになり給ふ年、御袴著の事、一の宮の奉りしに劣らず、内蔵寮、納殿の物をつくして、いみじうせさせ給ふ。それにつけても、世の謗のみ多かれど、この御子のおよすけもておはする御かたち心ばへ、有りがたくめづらしきまで見え給ふを、え嫉みあへ給はず、ものの心知り給ふ人は、かゝる人も世に出でおはするものなりけりと、あさましきまで目を驚かし給ふ。

その年の夏、御息所はかなき心地に煩ひて、まかでなんとし給ふを、暇さらに許させ給はず。年頃常のあつしさになり給へれば、御目馴れて、帝「なほ暫し試みよ」と宣はするに、日〻におもり給ひて、たゞ五六日の程に、いと弱うなれば、母君泣く〳〵奏して、まかでさせ奉り給ふ。かゝる折にも、あるまじき恥もこそと、心づかひして、御子をばとゞめ奉りて、忍びてぞ出で給ふ。限あれば、さのみもえとゞめさせ給はず、御覧じだに送らぬおぼつかなさを、いふかたなくおぼさる。いと匂ひやかにうつくしげなる人の、いたう面痩せて、いと哀れと物を思ひしみながら、言に出でても聞えやらず、あるかなきかに消え入りつゝ、物し給ふを御覧ずるに、來し方行く末思召されず、よろづの事を泣くなく契り宣はすれど、御答もえ聞え給はず。まみなどもいとたゆげにて、いとゞなよなよと、我かの氣色にて臥したれば、いかさまにかと思召し惑はる。輦車の宣旨など宣はせても、又入らせ給ひては、さらにえ許させ給はず。帝「限あらん道にも、後れ先だゝじと契らせ給ひけるを、さりともうち捨て

☆「さうじ」ノ清濁、首書ノママ。

☆「およすけ」ノ「す」、首書清ム。

○と——とのみ

○ほ——もほ

○か——ナシ
○は——ナシ

ては、え行きやらじ」と宣はするを、女もいといみじと見奉りて、

更衣「限とて別るゝ道の悲しきにいかまほしきは命なりけり

いとかく思う給へましかば」と、息も絶えつゝ、聞えまほしげなる事は有りげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならんを御覧じ果てん、と思召すに、人々「今日始むべき祈禱ども、さるべき人〳〵承れる、今夜より」と聞え急がせば、わりなく思しながら、まかでさせ給ひつ。御胸のみつとふたがりて、つゆまどろまれず、明しかねさせ給ふ。御使の行きかふ程もなきに、なほいぶせさを限なく宣はせつるを、里人「夜中うち過ぐる程になん絶え果て給ひぬる」とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて歸り參りぬ。聞召す御心惑ひ、何事も思召しわかれず、籠りおはします。御子は、かくてもいと御覧ぜまほしけれど、かゝる程にさぶらひ給ふ、例なき事なれば、まかで給ひなんとす。何事かあらんともおもほしたらず、さぶらふ人〳〵の泣き惑ひ、上も御泪の隙なく流れおはしますを、あやしと見奉り給へるを、よろしき事にだに、かゝる別の悲しからぬはなきわざなるを、まして哀にいふかひなし。

限あれば、例の作法にをさめ奉るを、母北の方、「おなじ煙にも上りなん」と泣きこがれ給ひて、御送の女房の車にしたひ乘り給ひて、愛宕と云ふ所に、いといかめしうその作法したるに、おはしつきたる心地、いかばかりかは有りけん。母君「空しき御骸を見る〳〵、なほおはするものと思ふがいとかひなければ、灰になり給はんを見奉りて、今はなき人とひたふるに思ひなりなん」と、さかしう宣ひ

☆おもう——思
○ひつ——ナシ
○のみ——ナシ
○も——ナシ
☆煙——けふり
○も——ナシ
☆「ひたふる」ノ「ふ」、首書清ム。

つれど、車より落ちぬべうまどひ給へば、「さは思ひつかし」と、人〳〵もて煩ひ聞ゆ。内裏より御使あり。三位の位贈り給ふよし、勅使來て、その宣命讀むなん悲しき事なりける。女御とだにいはせずなりぬるが飽かず口惜しう思さるれば、今一階の位をだにと、贈らせ給ふなりけり。是につけても、憎み給ふ人〳〵多かり。物思ひ知り給ふは、様かたちなどのめでたかりし事、心ばせのなだらかにめやすく、憎みがたかりし事など、今ぞ思し出づる。様あしき御もてなし故こそ、すげなう嫉み給ひしか、人がらの哀に、情有りし御心を、上の女房なども戀ひ偲びあへり。「なくてぞ」とは、かゝる折にやと見えたり。はかなく日頃過ぎて、後のわざなどにも、こまかに訪はせ給ふ。程經るまゝに、せん方なう悲しう思さるゝに、御方〳〵のとのゐなども絶えてし給はず、たゞ涙に漬ちて明し暮させ給へば、見奉る人さへ露けき秋なり。弘徽「亡きあとまで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などには猶ゆるしなう宣ひける。一の宮を見奉らせ給ふにも、若宮の御戀しさのみ思し出でつゝ、親しき女房、御乳母などを遣しつゝ、有様を聞召す。

野分だちて、俄に膚寒き夕暮の程、常よりも思し出づる事多くて、靫負の命婦といふを遣す。夕月夜のをかしき程に出し立てさせ給ひて、やがてながめおはします。かうやうの折は、御遊などせさせ給ひしに、心ことなる物の音をかき鳴し、はかなく聞え出づる言の葉も、人よりは殊なりしけはひかたちの、面影につと添ひて思さるゝにも、闇の現にはなほ劣りけり。命婦かしこにまかで著きて、門引き入るゝより、けはひあはれなり。やもめ住みなれど、人一人の御かしづきに、とかくつくろひ

○り——りも
○ど——ろ
☆「三位」、河内本ニハ「みつ」トアル。
☆是——これ

二

☆なくてぞ……ある時はありのすさみに憎かりきなくてぞ人は戀しかりける〈源氏釋〉
○と——御と
☆「ひち」の「ち」、首書清ム。

☆野分——野わき
☆「ゆけひ」ノ「け」、首書清ム。
☆夕月夜——ゆふつくよ
☆やみのうつゝ……むば玉の闇の現は定かなる夢にいくらもまさらざりけり〈古今集・戀三・六四七〉
○か——う

立てて、めやすき程にて過し給ひつるを、闇に昏れて臥し給へる程に、草も高くなり、野分にいとゞ荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎にもさはらずさし入りたる。南面に下して、母ぎみとみに え物も宣はず。母君「今までとまり侍るがいと憂きを、かゝる御使の、蓬生の露分け入り給ふにつけても、はづかしうなん」とて、げにえ堪ふまじく泣い給ふ。命婦「『参りてはいとゞ心苦しう、心肝もつくるやうになん』と内侍のすけの奏し給ひしを、物思ひ給へ知らぬ心地にも、げにこそいと忍びがたう侍りけれ」とて、やゝためらひて、仰言傳へ聞ゆ。命婦「『暫しは夢かとのみたどられしを、やう〳〵思ひしづまるにしも、さむべき方なく堪へがたきには、いかにすべきわざにか、とも問ひ合すべき人だになきを、忍びては参り給ひなんや。若宮の、いとおぼつかなく露けき中に過し給ふも、心苦しう思さるゝを、とく参り給へ』など、はか〴〵しうも宣はせやらず、むせかへらせ給ひつゝ、かつは人も心弱く見奉るらんと、思しつゝまぬにしもあらぬ御氣色の心苦しさに、承りも果てぬやうにてなんまかで侍りぬる」とて、御文奉る。母君「目も見え侍らぬに、かく畏き仰言を光にてなん」とて見給ふ。

勅書「程經ば、すこし打ち紛るゝ事もやと、待ち過す月日に添へて、いと忍びがたきはわりなきわざになん。いはけなき人もいかにと思ひやりつゝ、諸共にはぐゝまぬおぼつかなさを、今はなほ、昔の形見になずらへて物し給へ」など、こまやかに書かせ給へり。

帝宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ

とあれど、え見給ひ果てず。母君「命長さのいとつらう思ひ給へ知らるゝに、松の思はん事だに恥かし

三

○ひつ——へ
○を——ナシ
○し——しゝつみ
○ぎみ——君も

○は——いとは
○ひ——ふ

○に——ナシ

○も——ナシ

三

○も——を

☆おもう給へしら——思給へしら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com